

海辺の森と花

大西 健太郎

どのくらい時間が経っただろう

それほど長くはないはずだ

瞼がゆっくり半分開く

目の上では おぼろな残像たちの立ち話

さつきから同じことを繰り返している

瞼の縁には 森がある

木々のすき間 たくさんの脚が行き来する

映っては消え 映っては消え

影が目の奥へ伸びていく

どこまでも緑の暗がり 心地がいい

ふと 大きな鳥が木立の間を横切った

「森から出る道を忘れてはいけないよ」